

I 天神遺跡発掘調査報告

1. 調査にいたるいきさつと経過

’71年以来、「開発」の被害者として、次々に破壊されつづける天神遺跡は今回の調査に至るまでにどのような姿を現わしてきたのか。また、それら諸情勢の中で、私達出雲考古学研究会が今回の調査に着手せねばならなくなったのはなぜか。少し繁雑になるが、本報告の前提であり、また2度にわたり刊行された報告書との関連もあるのでやや立ち入って整理しておく。

「出雲市海上地区土地区画整理事業」の進行が、遺跡発見の端緒であった。工事と併行した厳しい条件下で、多くの遺構・遺物の姿が明らかとなった。調査に遅れること3年『調査の記録』が刊行され、遅ればせながらも以下のような結論が提示された。

「(1)弥生式土器、土師器、須恵器等の破片散布状況から工事の実施されたほぼ全域にわたって埋蔵文化財が包蔵される土地であると推定される。調査した第1～6調査地区は、顕著な遺構が見られたところであり、それぞれの地区の遺構はいずれもかなりの広がりをもつものである。このことは、今後の市街化にあたっては事前に調査がなされねばならないことを意味するものであり、調査には相当の期間が必要であることを示している。

(2)第1～3調査地区の付近は、弥生時代中期後半ごろの集落跡が存在すると思われる。山陰における集落跡の調査例は、倉吉市服部遺跡、米子市青木遺跡、福市遺跡、安来市八協谷遺跡等が挙げられるが、いずれも低丘陵上に作られた集落跡の調査例であり、平地に立地する場合の調査例は少ない。出雲平野での集落跡の調査は、矢野貝塚、多聞院貝塚程度で、それも限られた部分の調査に終わっていることを考えると、この天神遺跡のもつ役割は大きいといわねばならない。弥生時代の壺棺墓は、本県では初見のものであり、その付近で検出された溝は1つの区画を示すと思われ、遺構の全貌究明は極めて興味あるものです。

また、時代は下って完形のすずの付着した土師器かま(釜)の検出や、溝からの土師器・高坏、まりの検出は古墳時代の集落跡の存在を示すものである。平野の縁辺に築かれた大念寺古墳、築山古墳などこの地域最大級の古墳の被葬者たちの背景をさぐるに格好の遺跡でもある。

(3)第5、6調査地区を中心とする付近は、出土遺物から推して、奈良時代から平安時代、一部は中世頃の建物址と思われる。径70cmという柱穴の規模や、宮小路からの墨書土器の出土は、地方官衙跡(郡家、郷倉、駅など)らしきものを思わしめる。(以下略)」

この発見、調査の原因となった「区画整理事業」は市街化の波及を当然にもたらす。医大道路ともいえる古志―小山線の開通も相まって、小規模の住宅、公共団体関連の建物などが乱立するの

また当然のことであった。

心ある研究者、愛好者はこの遺跡破壊を憂え、調査、保護を求めているが、75年に医大宿舍建設の計画、事前調査の開始に伴って一つの形ある声となった。要望書の「調査区域の拡大」「保護計画の策定」などは結局一つも実現できなかったが、結集した四団体は遺跡の重要性を確認し、現地説明会などを通じてそのことを広く訴えた。

この75年調査では、第1調査区で「弥生時代の土壇14、溝4、古墳時代の土壇3、溝1をはじめ壇内に人頭大の石を伴う奈良・平安時代の大形土壇3、弥生時代から古墳時代前期にかけて掘り込まれた溝、時期不明の土壇10など各種時代にわたるものがあり」、第2調査区では「建物6棟(SB01～06)溝状遺構6本(SD01～06)のほか不規則な多数の柱穴群」が検出され、結論部分では「諸般の事情で十分な発掘面積が得られなかったが調査の結果は多くの貴重な新発見とともに弥生時代墓制の解明、神門郡家の所在をめぐる問題など、山積する重要な課題に多くの示唆を与えたというべきであろう」としている。('75年報告)

その後、島根大学考古学研究会による分布調査の成果は出雲高校社会部の手によって公刊され、(注1)、天神遺跡の推定範囲を広げ、より明らかにした。

しかし、依然として破壊は停まるところを知らず、特に「公共団体」関係諸施設においては、都市計画公園建設を筆頭にして、完全無視の形で強行された。まったく憂慮すべき状況となった。

「あと何年もつか」という不安と焦りの中、前述の75年報告が刊行され、さらに天神遺跡「神門郡家」説が提起されても、資料的制約のもとでは建設的であつ積極的な研究・保護の原動力とはならなかった。

「このまま放っておいてよいのか」という疑問を真摯に受けとめようとした私達数名は、その限界性を当初からふまえたうえで、敢て「自主発掘」、「遺跡の性格確認」を目ざして調査計画をたてた。

1. 行政調査でない調査。
2. 各自のカンパによる経費捻出。
3. 広範に協力、援助を求める。
4. 遺構の確認、性格の究明を統一見解として、調査は'78年8月10日から22日まで11日間、延80名の労力を費して計62.5㎡を完掘した。

なお、これらの経過や問題点は後に再びふれるので、以下略表を付して、一応資料を呈示しておく。

(注)

1. 出雲高校社会部『紫苑』13号、'76年

天神遺跡略年表

1971 年		1975 年	
12 月 22 日	西尾克己（島根大学学生）・川上稔（法政大学学生）、出雲市塩冶町海上・天神町地内の都市計画道路工事中に土師器・須恵器等多数発見	2 月 1 日	土地区画整理事業に伴う道路完成 松江考古学談話会で当遺跡の現状を報告
23 日	島根県教育委員会・出雲市教育委員会へ連絡（以下、県教委・市教委とす）	春	農林省出雲食糧事務所建設される（未調査）
28 日	県教委・市教委、試掘により遺構確認	4 月	第 1 次調査報告発行 遺跡内に島根医科大学学長官舎等の建設計画が明らかになる
1972 年		5 月	第 2 次調査始まる 古代から近世までの遺跡であることが確認される（弥生時代の墓地、柱穴群）
1 月 12 日	発掘調査開始（第 1 次調査）		松江考古学談話会（代表 東森市良）、現地見学会を開催
21 日	壺棺墓（弥生時代）・柱穴群（律令時代）検出 ＜出雲市社会教育課長談話＞（新聞報道） 「今後の調査は範囲を広げること考えてみたい。遺跡の保存方法も記録のみに留めるか、そっくり残すか、県教委と検討したい。」	6 月 11 日	島大考古学研究会（代表 杉浦英一）、要望書提出（県教育長・出雲市長宛に）
24 日	調査打ち切り	27 日	出雲部考古学会（代表 新宮一世起）・塩冶史談会（代表 河野憲善）・島大考古学研究会・松江考古学談話会、要望書提出（県教育長・市教育長宛に）
12 月	道路工事完了に対し、発見者、県教委・市教委へ抗議 ＜出雲市都市計画課長談話＞ 「当課の責任部分は道路のみである、云々」 ＜市教委談話＞ 「金銭的余裕なし」	7 月	第 2 次調査終了 官舎建設 島大考古研当地で合宿（土器表採等を行う） その他の場所で破壊すすむ
1973 年		1976 年	
1 月	16m 道路（県道古志一小山線）海上大橋工事現場で土器多数発見（未調査） 高西公園が遺跡内に建設される（未調査）	4 月	出雲高校社会部『紫苑』13 号に「出雲市天神遺跡」を発表す
1974 年		11 月	出雲部考古学会、要望書提出 建設省共同宿舎、遺跡内に建てられる（未調査） 島根大学学生大岡晴雄 県教委へ連絡 ＜建設省と県教委の協議＞ 「今年度分はすでに建設され、残る部分は調査される見通し」
11 月 13 日	発見者、市教委へ調査求め抗議 ＜市教委談話＞ 「1972 年の報告が出ていないので価値判断ができず、都市計画課と協議を行なえない。県教委からも連絡はない。」	1977 年	
		春	'75 年報告の発行
12 月	海上大橋完成	1978 年	
		8 月	出雲考古学研究会、天満宮の南で発掘調査

2-1 地理的環境

出雲平野の歴史は二大河川と日本海のおりなすものといえる。それほどこの地における生活はその地理的環境に負うところが大きいのである。

縄文時代、日本海と出雲平野を隔てる北山山塊の山麓の北西、大社町付近に人々の生活の痕跡が認められる。北山の獣、日本海の魚貝をとる絶好の地であったことがうかがわれる。

弥生時代になると、神戸川、斐伊川のつくり出す自然堤防上にかかなりの遺跡が出現する。水はけのよい自然堤防上に住居を構え、付近で水田の耕作を営む集団があちこちに生まれ、両河川と戦いながらも、少しずつ生産が発達していくのである。

遺跡の分布に偏りがあることは図1からも明らかで、ドーナツ状に平野の縁辺部にまず出現する

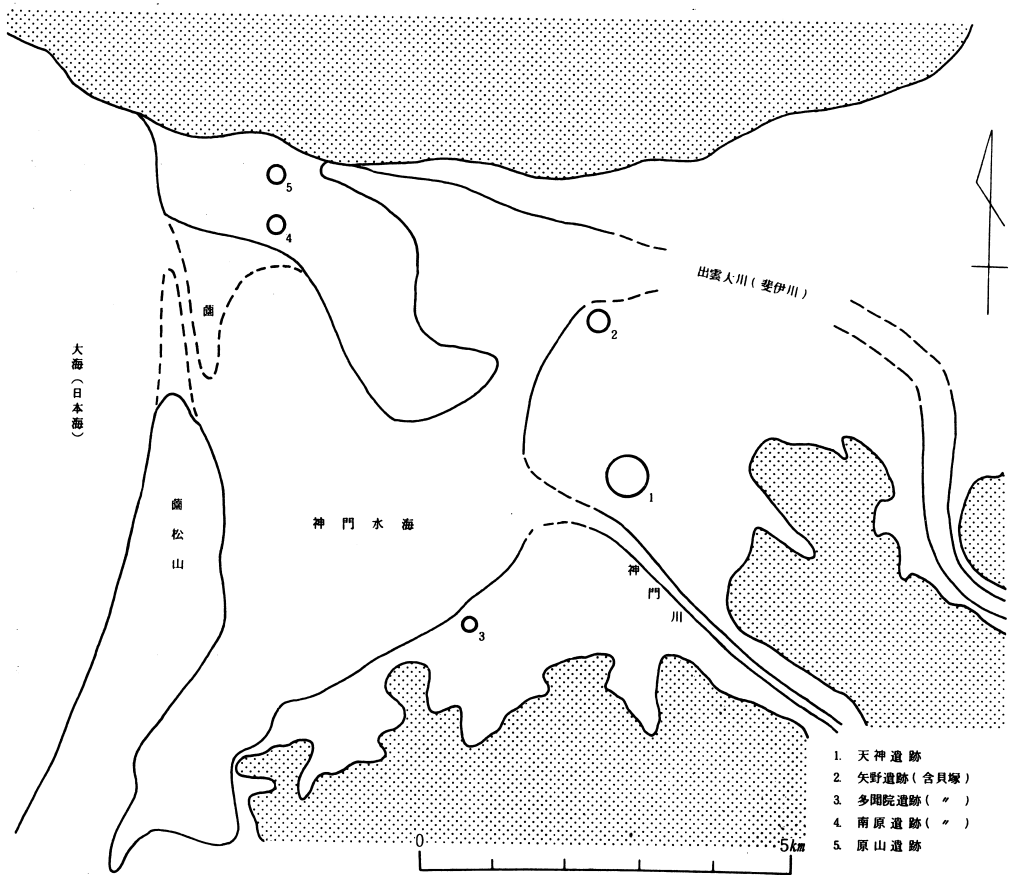


図1 天神遺跡と古代の出雲平野

ことが知られる。これは、『出雲国風土記』にいう「神門水海」が当時すでに平野の中心部に存在していたからであり、当時の出雲平野が上記二河川と神門水海によってかなりの湿潤地を有していたことが知られる。弥生時代以降の水田拡大にとってその克服こそが最大の課題となるのである。

さて、この神門水海は何時頃形成されたのであろうか。

簸川平野の最西端、大社湾と接する部分に南北に連なる砂丘地帯がある。「神門水海より大海に通う潮の長さ3里、広さ120歩」と記される川によって南北に分けられている。

多聞院遺跡は、出雲市知井宮町に所在する貝塚遺跡で、神戸川の自然堤防上に立地し、付近の水田面との比高は1～2mをはかる。1958年に行なわれた発掘調査によって、弥生時代中期後半から古墳時代前期にわたる土器群が検出されている。層位は上層から表土－混土貝層－混貝土層－黒褐色土層の順で、黒褐色土層より上層に遺物の出土をみる。

黒褐色土層には弥生時代中期後半の土器を含んでいるが、貝類はほとんど含まれない。混貝土層は弥生時代後期の土器を主とし、混貝土層の上部層（混貝土層Ⅰ）では少量ではあるが古式土師器を含み、淡水産のヤマトシジミを相当量含んでいる。さらに混土貝層にいたるとヤマトシジミの純貝層といっても良いほどで、古式土師器のみを出土している。

こうしてみると、この層位の示すところは重要である。これによれば、弥生時代末期に『風土記』にいう「神門水海」の原形が形成された可能性が強いといえよう。

つまり、混貝土層の下部層に戯水性貝類が顕著なのは、遺跡の前面には潟湖は未だ形成されておらず、入海であって、混貝土層の上部層もしくは混土貝層のヤマトシジミで構成された主淡水層の時期にいたってはじめて潟湖の様相を呈するようになったことを示している。

とすれば、弥生時代における入海の状態は後期にいたって何らかの原因による相対的海水準の低下という事実から海面下の沿岸州が離水し、それを基盤にして砂嘴が形成されて、入海の外海への開口部がほとんど塞がれ、潟湖となったと推察される。

このように神門水海の成立を一応とらえておくならば、天神遺跡において生活が始められた弥生時代中期には、出雲平野において外海から大きく湾入した入海が存在し、弥生時代末に原「神門水海」ともいえる潟湖にかわり、古墳時代をへて奈良時代には『風土記』に記されたような「水海」に変遷をとげたことが理解できる。

さて、出雲平野一帯のコンタ図（図3）によれば、自然堤防と沖積低地との界線は標高7mぐら

表	土
混 土 貝 層	
混 貝 土 層 Ⅰ	
" Ⅱ	
" Ⅲ	
黒 褐 色 土 層	
砂	層

図2 多聞院遺跡層序

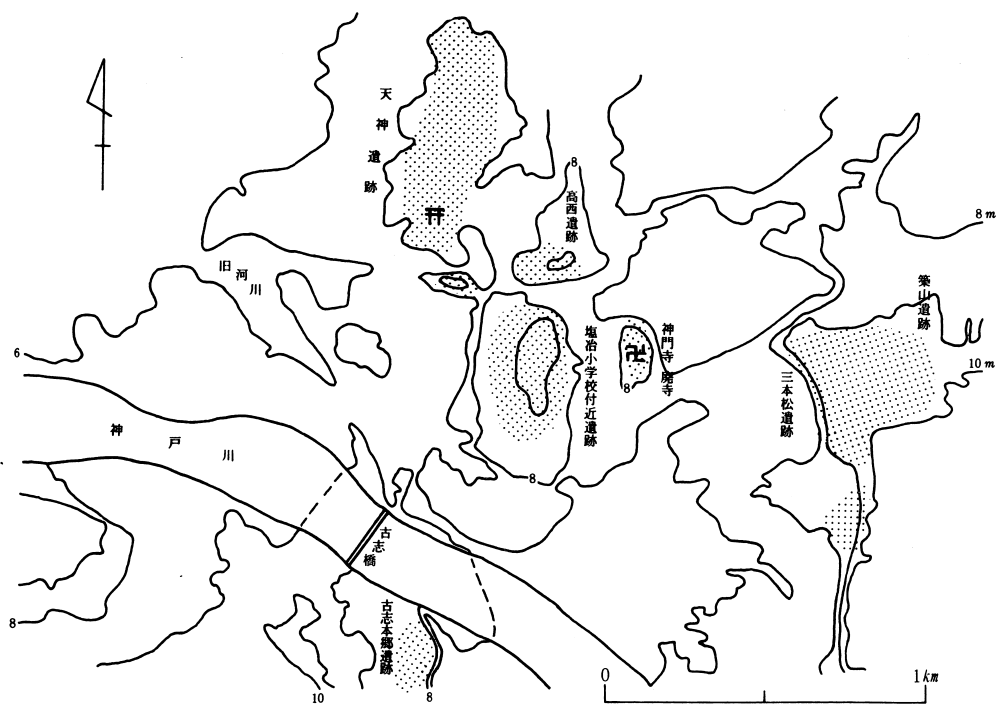


図3 遺跡立地と微地形

いで遺物の散布は自然堤防の頂付近に認められるところである。

この自然堤防上における一般的な層序は上層から表土（含耕作土）－暗褐色土－黄褐色土－砂礫層となっており、暗褐色土層中に遺物を包含している。

ここで旧河道について若干検討してみよう。現在は大半が水田となっており、耕作土の下層が灰黒色土から黒褐色土で粘性も強く、水はけも不良である。図3にみるように旧神戸川左岸に位置する自然堤防は最高地点が+9 mで右岸に比べ1 mくらい低いのが、幅は400～700 mあって、右岸の200～400 mに倍している。

さらに、旧河道はこれ以外にも神門寺の北から西に折れて自然堤防を横ぎって願楽寺東方に至るものが認められるが、これは分流であったと解される。その他にも若干の河道が認められるが、いずれも主たるものではなかったようである。

出雲平野の地理、特に歴史地理の分野に残された課題は多く、二大河川は現代においても大きな問題（分水等）の渦の中にある。早急かつ多面的な検討が必要な時である。

2-2 歴 史 的 環 境

（ 弥 生 時 代 ）

出雲平野において稲作農耕がいち早く開始されたのは、大社境内遺跡、原山遺跡、矢野遺跡（貝塚を含む）等が存在する西部と北西部である。これらの遺跡は当時存在していた神門水海の汀線に近い低湿地に位置し、技術の未熟な当時としては水稻耕作に最も適したところであった。

これに続く前期後半から中期にかけては前述の遺跡のみで、集落の増加は認められない。他方、中期後半から後期にかけては平野全域に拡大し、前時代から継続する3遺跡に加えて、知井宮多聞院遺跡（貝塚を含む）、古志本郷遺跡（貝塚を含む）、下古志田畑遺跡、高西遺跡、山持川遺跡等が微高地や扇状地、或いは低丘陵上に営まれる。この様な遺跡出現の背景には、鉄製農耕具の普及に伴う農業技術の進歩や神門水海の淡水化などの自然環境の変化が考えられる。なお、農耕が軌道にのった中期でも一部に貝塚が遺されているのは、この平野に於ける稲作受容の稚拙さを物語っている。この時期における集落の実態はほとんど解明されていないが、埋葬遺構は一部明らかになっている。中期のものとしては天神遺跡で発見されている壺棺墓群があり、後期前半では矢野遺跡の土坑墓が知られている。矢野遺跡の場合は土器とともに細身の管玉が数個検出されており、この頃かなり貴重な玉を入手し、副葬しうる者が共同体の中から出現してきたことを示している。

後期の集落は中期の延長であり変化はないが、埋葬遺跡としては後期後半から古墳時代前期にかけて大津町来原の丘陵上に四隅突出型方形墓3基を含む西谷墳墓群が現われる。内でも3号墓は一辺30mを越す大規模なものであり、墳頂部からは埋葬時のものと考えられる祭祀性をもった大型の吉備型器台及び壺が発見されている。この地域における古墳時代への移行過程と吉備地方との関連を知る上での好資料といえよう。

（ 古 墳 時 代 ）

弥生時代後期の西谷墳墓群に続く本格的な古墳は発見されておらず、松本1号墳や神原神社古墳が築かれた斐伊川中流域及び造山1号墳を始め多くの大規模古墳が築かれた安来平野と好対照をなしている。しかし壺棺墓として斐川町狼山遺跡、出雲市四絡小遺跡等が僅かに知られている。

一方、この時期の集落は前時代と同様に平野の周縁部や中央部に営まれ、規模も数もあまり変わらない。

前期末より中期にかけては、当地域最古の前方後円墳とされる大寺古墳（全長50m、竪穴式石室）が出現する。これに続く中期古墳には、斐川町の軍原古墳（前方後円墳？長持型石棺）、神庭岩舟山古墳（全長約58mの前方後円墳、舟型石棺）があるが、これらは平野の周辺部に立地し、当時は宍道湖に面した谷底平野の一角にすぎない地域であった。弥生時代以来生産の中心地である

斐伊川・神戸川下流域には一基も古墳が確認されず、また、集落にも消滅するのが少なからず存在し、この当時の平野は不安定な時期であったと推定される。

この様に、中期古墳は小規模な谷間や扇状地をその経済的背景にしたものであり、出雲平野は今だ、政治的に一体となりえなかったのである。

後期になると平野の南西部、出雲市下古志町に天神原古墳（約30mの円墳）、北山東麓の平田市国富町に上島古墳（15mの円墳？、家形石棺直葬、小型竪穴式石室）が出現する。

この両古墳の後、6世紀後半から7世紀にかけて、ほとんど古墳らしきものが存在しなかった神戸川下流域一帯に出雲地方を代表する大形の横穴式石室をもつ後期古墳が集中する。

神戸川右岸には塚山古墳（横穴式石室、家形石棺）、大念寺古墳（84mの前方後円墳、横穴式石室、家形石棺2）、上塩冶築山古墳（約40mの円墳、横穴式石室、家形石棺2）、地藏山古墳（石棺式石室、家形石棺、石床）、半分古墳（約40m前方後円墳、横穴式石室、石棺）、左岸には小坂古墳（石棺式石室）、大梶古墳（石棺式石室）、放レ山古墳（横穴式石室、石床3）、妙蓮寺山古墳（49mの前方後円墳、横穴式石室、家形石棺）、宝塚古墳（横穴式石室、家形石棺）などがある。

中でも大型の前方後円墳に巨大な石室と石棺を置く大念寺古墳や整美な切石造りの石室と優美な金銅製品を副葬した築山古墳はこの流域にとどまらず、山陰地方を代表する後期古墳である。この一連の古墳の出現は平野の安定（それに先行する開発）を、そしてこの時期の首長権力の強大さと平野の政治的統合を物語っている。

他方、これらの古墳と同時に横穴墓が出現する。現在、平野の南側丘陵を中心に数百穴が知られており、その分布には疎密が認められる。斐伊川・神戸川下流域には密集しているが、周辺の谷間や北山周辺では数群が点在するだけである。これは平野の開発が一様ではなかったことを示すかのようである。なお、横穴に葬られた人々は『正倉院文書』（大税賑給歴名帳、739年）から察すると、地域首長の配下にいた有力農民層と推定される。

この時期の集落は神門水海や砂丘を除く全域に拡大され、山麓、旧自然堤防、微高地等あらゆる場所が選ばれている。

（律令時代）

当時西流する斐伊川を境に、西・南部が神門郡、東・北部が出雲郡の二郡が設置され、各々に8郷が存在した。天神遺跡のある神戸川流域は神門郡に当り、『出雲国風土記』（733年）によると、朝山、日置、塩冶、八野、高岸、古志、滑狭、多伎の各郷と余戸里、狭結駅、多伎駅、神戸里から成立していた。これによって、当時の集落は山あい、平野の中央をとわず全域に広がり、その数の疎密をも知ることができる。

『風土記』は斐伊川の下流一帯の様子を次の様に伝えている。

河の両辺(あたり)は、或るいは土地豊かに沃(こ)えて土穀(たなつもの)・桑・麻、稔(みの)り款枝(たわわ)に、百姓(たみ)の膏腴(うるほひ)の藺(その)なり。或は土體豊(つちゆた)かに沃(こ)えて、草木叢(むらが)り生ひたり。(出雲大川条の一部)

生産力が上昇するにつれて、階層分化も進み、農民層の内では姓(かばね)を有するものも多くなり、他の農民を隷属させる者も出てくるようになる。

また、古墳時代後期以来の有力豪族は、律令体制の末端に組み入れられ、郡司等に任命され、勢力を温存することになる。中でも神門臣、刑部臣、日置部臣は新しく波及した仏教文化を摂取し、各々の本貫地の神門郡朝山郷、古志郷、出雲郡河内郷に新造院と呼ばれる私寺を建立する。

かくして、律令体制は強い形で貫徹しながらも、同時に郡司層の勢力を温存したことは、さらに階層分化を一層助長する原動力となったものと考えられる。

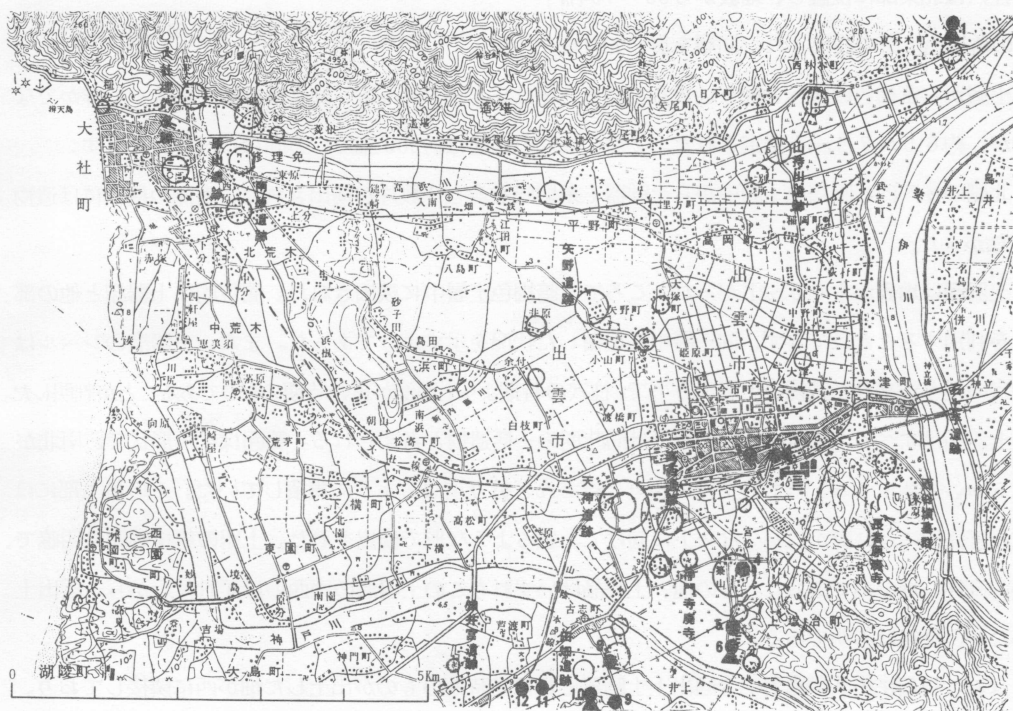


図4 天神遺跡と周辺の遺跡

- | | | | |
|----------|------------|-----------|------------|
| 1. 大寺古墳 | 2. 大念寺古墳 | 3. 塚山古墳 | 4. 上塩冶築山古墳 |
| 5. 地藏山古墳 | 6. 半分古墳 | 7. 大井谷横穴群 | 8. 大梶古墳 |
| 9. 放レ山古墳 | 10. 妙蓮寺山古墳 | 11. 宝塚古墳 | 12. 天神原古墳 |

3. 遺構、遺物 —'78年の調査—

(遺 構)

調査区は天満宮の南、出雲市天神町525の2番地(代表地番)の休耕地に、右図(図-5)のように設定した。以下、各グリッド毎に概要を記す。(なお、区の呼称は今回任意に定めた)

B-1区 ここでは柱穴2、土器溜、溝状遺構、不明ピット2を検出した。基本的な層序は表層-茶褐色土層-黄褐色土層(一部)-暗褐色土層-黄褐色砂層となっており、地山は砂層である。

柱穴は北東部に位置し、地表から60~70 cm下の黄褐色土層で検出され、同層を貫いて暗褐色土層から黄褐色砂層へと掘り込まれている。径は80~100 cmで、深さは砂層中に入って詳かでないが、約60~75 cmと推定された。2つの柱穴の距離は約200 cmで、方向はほぼ真北をさす。

北側の柱穴内、暗褐色土層中から土師器(糸切底を含む)数片が検出された。南側の柱穴には遺物はなかった。

土器溜は地表から60 cm下がったところで、暗褐色土層中に検出された。層位的に土器溜と他の部分を判別することはできず、同一層中に集積した状況を示すようであった。また、土器溜のレベルは柱穴の掘り込まれた黄褐色土層より下で、柱穴の時期より土器溜が古い時期のものであることが判明した。

土器溜はすべて土師器で、その大半は同時期の一括遺物と考えられる。範囲は三角形状で、南北が2.5 m、東西1.4 m、きわめて密であり、ほとんど折り重なるように集積していた。その最上部にはほとんど完形に近い甕が口をななめ下に向けて、載るような形で検出された。土器の集積範囲は明瞭で、甕、高環、埴のみであった。その他、土製品はいずれもこの土器溜の南西のはずれ付近から一括出土したが、性格は不明である。

なお、以前に古式須恵器や今回出土土師器とほぼ同時期のものが出土した畑が西に隣接しており、同様の性格をもつ土器溜がかなり広範囲に存在していることも考えられる。(図-17参照)

A-2区 溝状遺構4、ピット4が検出されたが、共に共伴遺物もなく性格は不明である。層序は表土-茶褐色土層-暗褐色土層-黄褐色砂層となっており、遺構が確認されたのは地表から120~160 cm下の黄褐色砂層の上面である。

溝状遺構はすべてN85°Eの角度で東西にはしっており、北から溝1~4とすると、それぞれの規

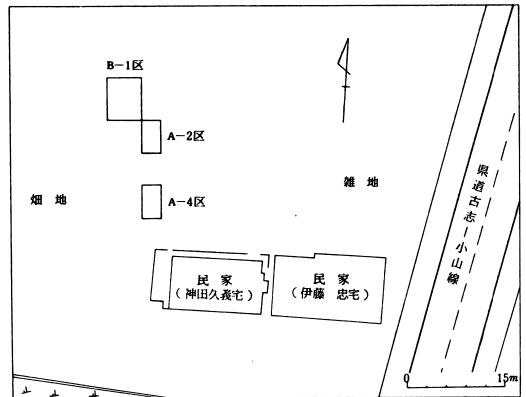
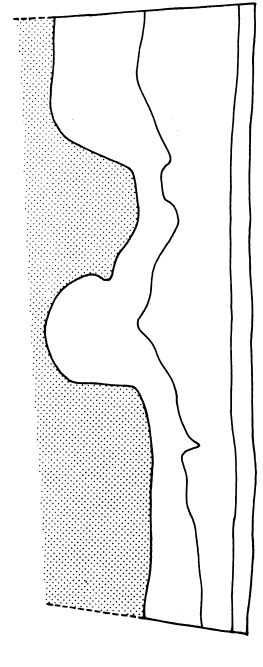
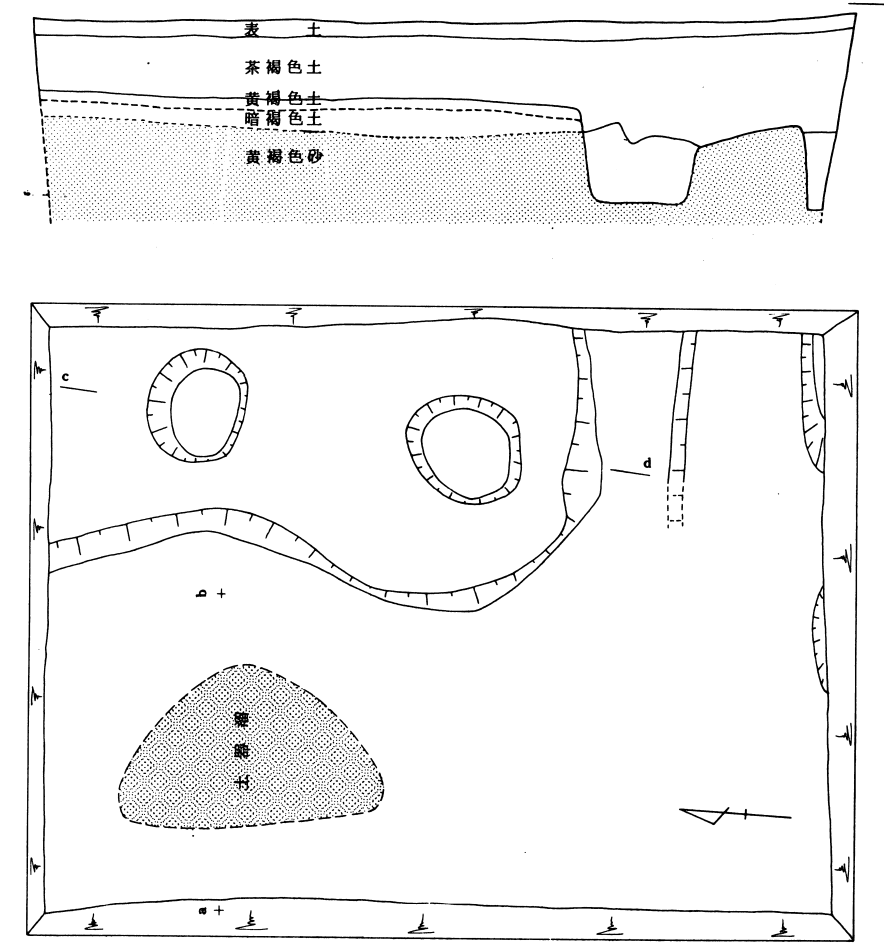


図5 調査区配置図

c ————— d (-80 cm)



0 2 m

图6 B-1区遺構実測図

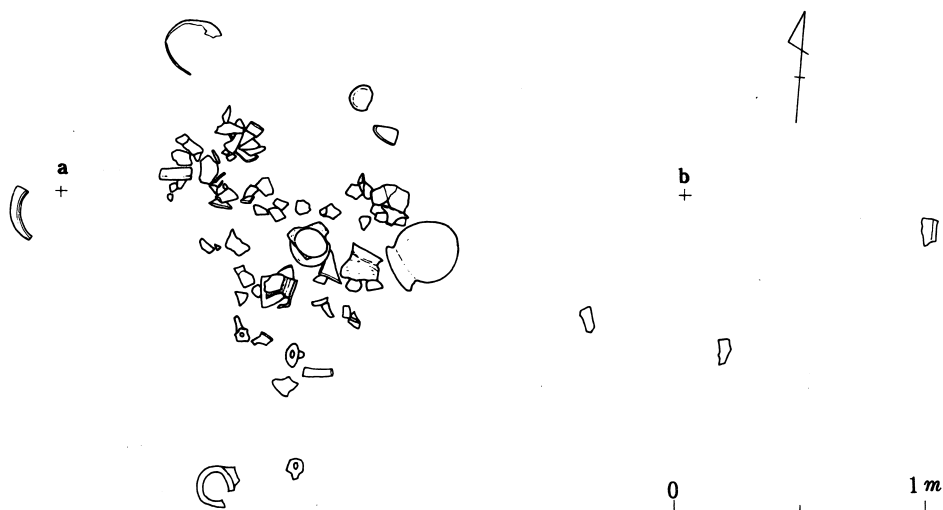


図7 B-1区土器溜実測図(1/40)

模は次のようである。溝1—上下端幅不明、深さ約50cm。溝2—上端幅40～50cm、下端幅6～20cm、深さ20～45cm。溝3—上端幅90～120cm、下端幅40～50cm、深さ20～45cm。溝4—上下端幅不明、深さ20～50cm。

また、円形のピットはP1(北東部)—径50cm、深さ8cm。P2(北西)—径40cm、深さ30cm。P3(西側壁)—径80cm、深さ55cm。P4(南)—径80cm、深さ40cm。

A-4区 溝状遺構2、ピット2を検出したが、2区と同様に相伴遺物はなく性格は不明である。

溝状遺構は南北方向にはしって、北壁の1m手前から東に大きく広がるもの(方向N2°E、上端幅60～120cm、下端幅35～100cm、深さ30cm前後)と途中から一段高く東へ派生するもの(N82°E、上部幅120cm、下端幅80cm)が検出された。

ピットは北西隅(円形、径80cm、深さ30cm)と南東隅(方形、一辺75cm、深さ8cm)に確認された。

この溝状遺構・ピットのレベルは、2区・4区共にほぼ同一で何らかの関連性を思わせるが、砂層に掘り込む形で遺構が形成されているため、「溝」・「柱穴」としての機能を果しえるかどうかは疑問であり、現時点では性格は全く不明で、その時期についても明らかでない。ただ、4区の溝直上から五輪塔残欠が出土しているので、あるいは中～近世まで降るものかもしれない。

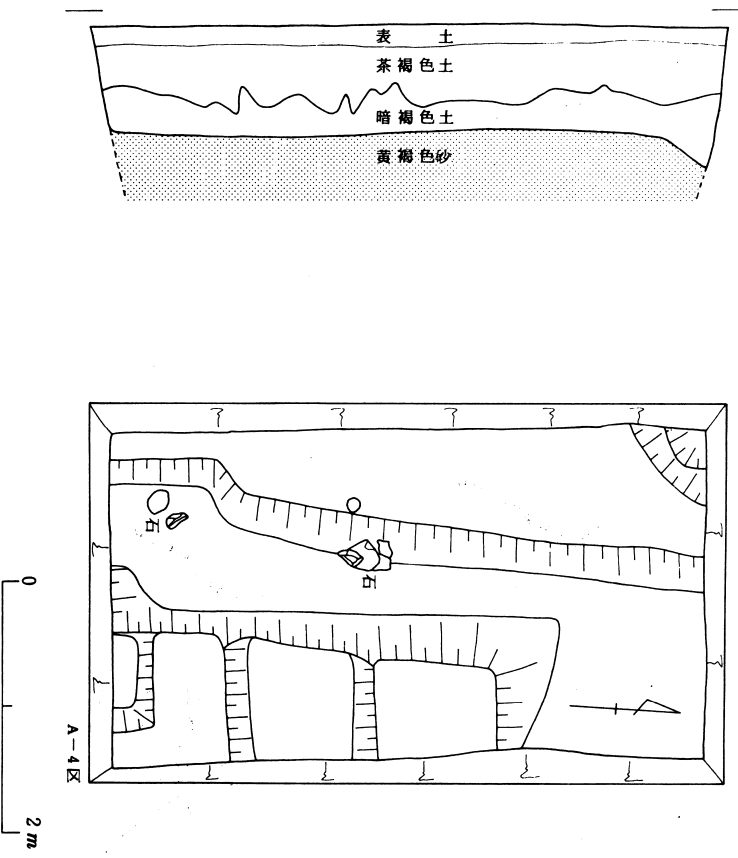
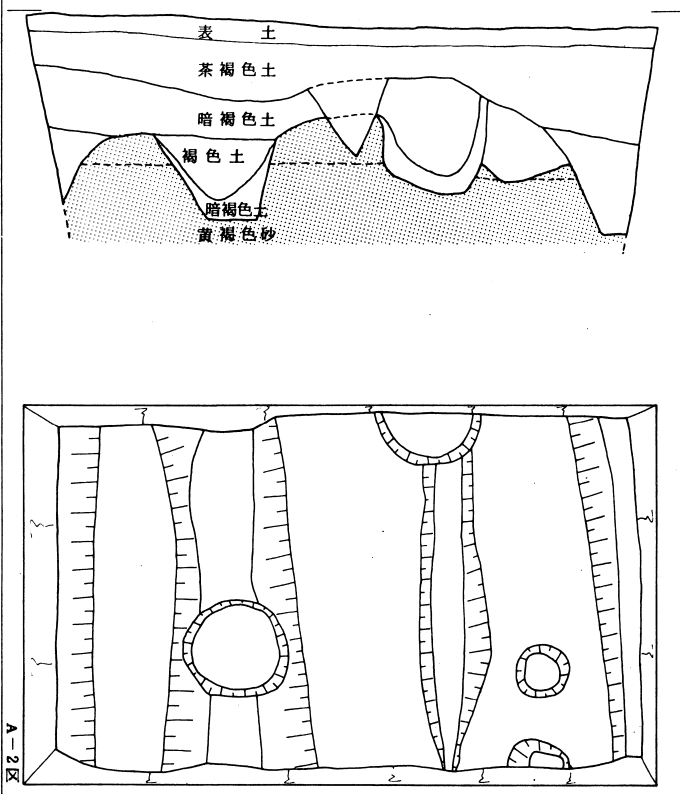


图8 A-2、4区遗址平面图

(遺物)

弥生式土器 壺、甕形土器が各調査区から遺構に伴わずに多数破片として検出された。

壺形土器には口縁部が朝顔形に大きく外反するもの(4)とやや外反し口唇部に立ち上がりのあるもの(5)とがある。ともに口唇部外面には櫛描きの文様をもち、前者には内面にも描くものがある。肩～胴部にかけては櫛による刺突文や平行沈線文およびヘラによる斜格子文を施したもの(3)があり、装飾性に富む。口縁部内外面は横ナデ、肩～胴部内外面はハケナデ、内面はヘラ削りである。

甕形土器には口縁部が逆L字のもの(1)とくの字になるもの(2)がある。肩～胴部にかけてはややふくらみがあり、底部に近づくときぼんで平底となる。口縁部外面に2～3条の凹線文、胴部に櫛による刺突文を有する。口縁部内外とも横ナデ、肩～胴部内外面はハケナデで調整している。また胴部以下や一部の内面はヘラによる横方向の磨きを行なっている。

土器は黄褐色もしくは茶褐色を呈し、胎土はやや粗で長石、石英を含み、焼成は良好である。

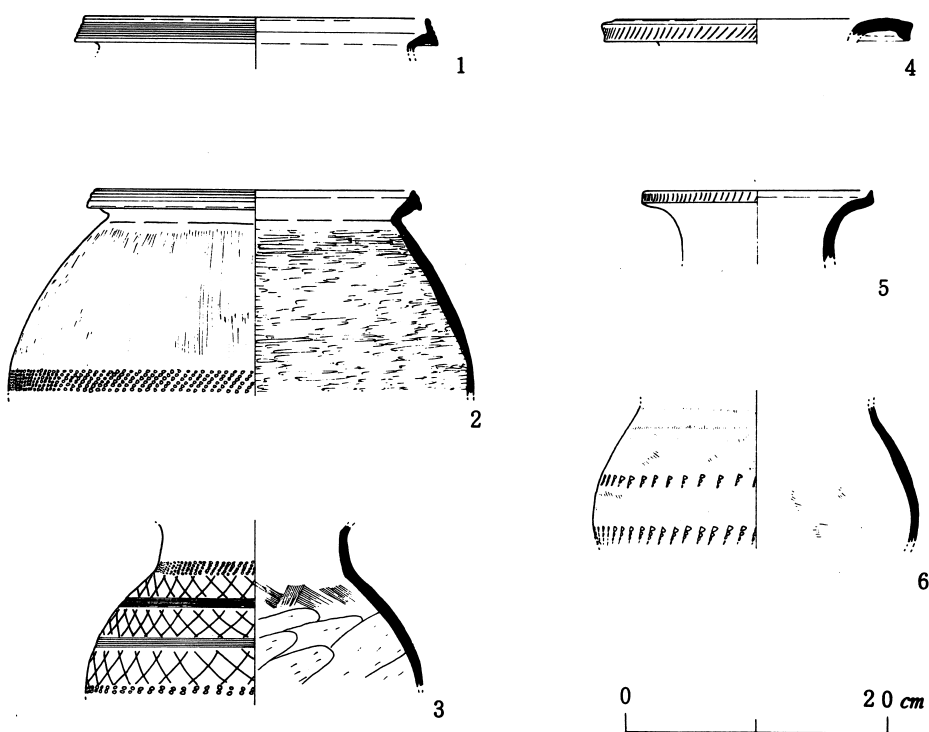


図9 弥生式土器実測図(1/6)

土師器（土器溜一図10～図13）

土器溜はすべて土師器で、器形が判明するものの割合は甕54%、高坏30%、碗16%である。大半は破片で、甕の中にはほぼ完形のものが1個体認められるのみであった。

甕は口縁部の特徴から3種類に分類することができる。

まず、比較的複合口縁の稜がよく残っているものとして図10-1・3があげられる。1は明瞭な稜を留め、3は稜部に沈線が施されている。共に薄手で文様は認められない。口縁部はナデで仕上げ、肩部以下は外面ハケ、内面は横方向のへう削りである。

次に、わずかに複合口縁の稜を残すものとして図10-2・4、図11-1をあげることができる。上記のものと手法的に変わりはないが、口唇部に平坦面を有する。ほぼ完形に近い図10-4は、肩がやや張り、口縁部を除いて薄手である。口縁部はナデ、肩部以下外面はハケ目で整えられ、内面は横及び縦方向のへう削り、底部付近では指頭圧痕が認められる。

口縁部が直線的でくの字状のものとして図11-2・3・4があげられる。上記2例と手法が異なる。

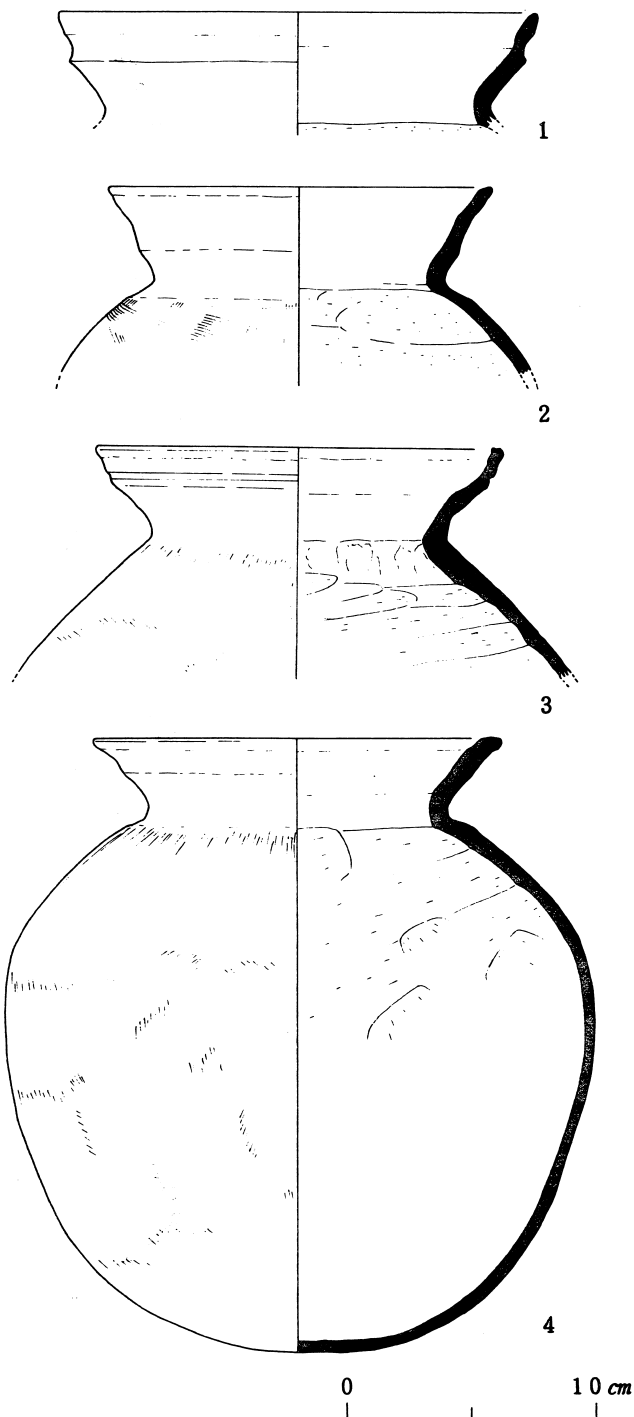


図10 土器溜出土土器実測図

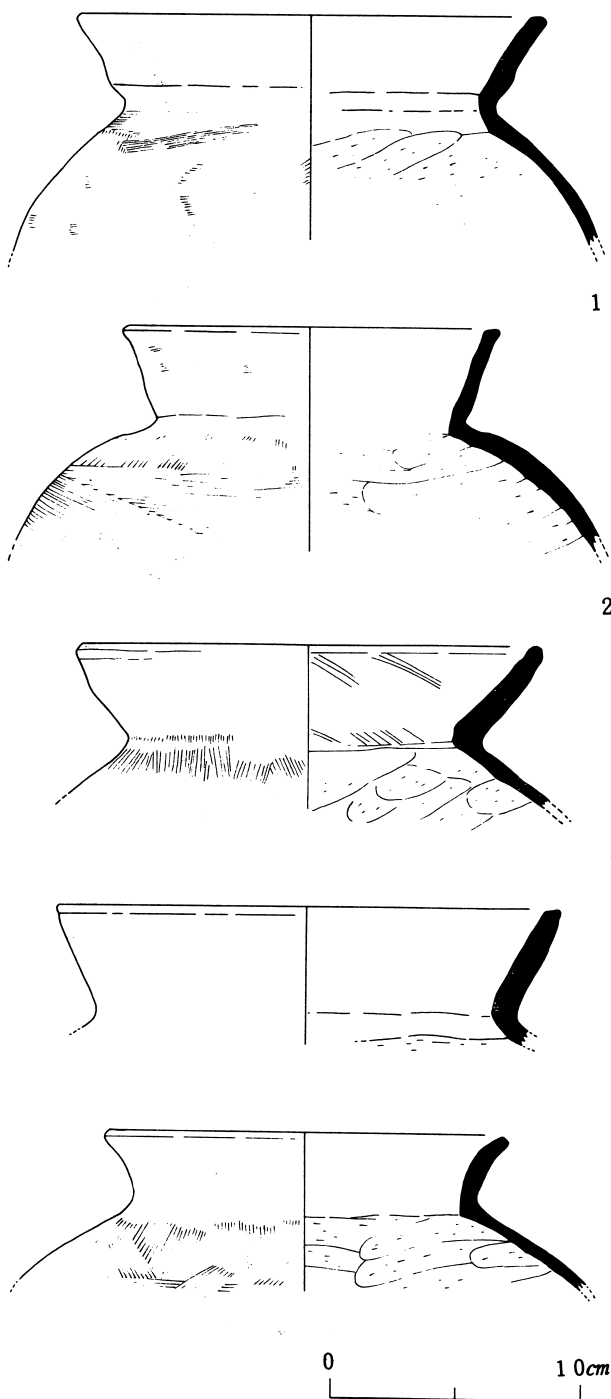


図11 土器溜出土土器実測図

り、口唇部もやや丸味を帯びる傾向がある。内外面の調整は上記のものとはほとんど変わらない。

図11-5は、口縁部が外反し、前3類にみられる頸部内面の圧痕やナデは認められず、内面のヘラ削りは口縁部内面のナデと境を接する。比較的薄手でシャープな感じを与える。他より時期がやや下るものと考えられる。耕作により土器溜に入り込んだ可能性もある。

なお、甕にはスス状のものが付着しているものが多い。また、完形に近い図10-4の底部外面には焼成前のものとみられるヘラ描きの5cm大の×印が認められ、中には貝類（セタシジミ30余、サラガイ1、カキ1）と小動物らしき骨片及び土師器片数片が混在していた。

高坏は、口径24cm前後の大形のもの、口径17cm程の小形のものがあるが、形態・手法ともに相違は認められない。

坏下部にはわずかに段を有し、口縁部はやや外反する。また、口唇部には浅い沈線がめぐる。脚部は下から4分の1程のところから大きく開いている。

坏部は、内外面ともナデで仕上げている。脚部外面は、ヘラやハ

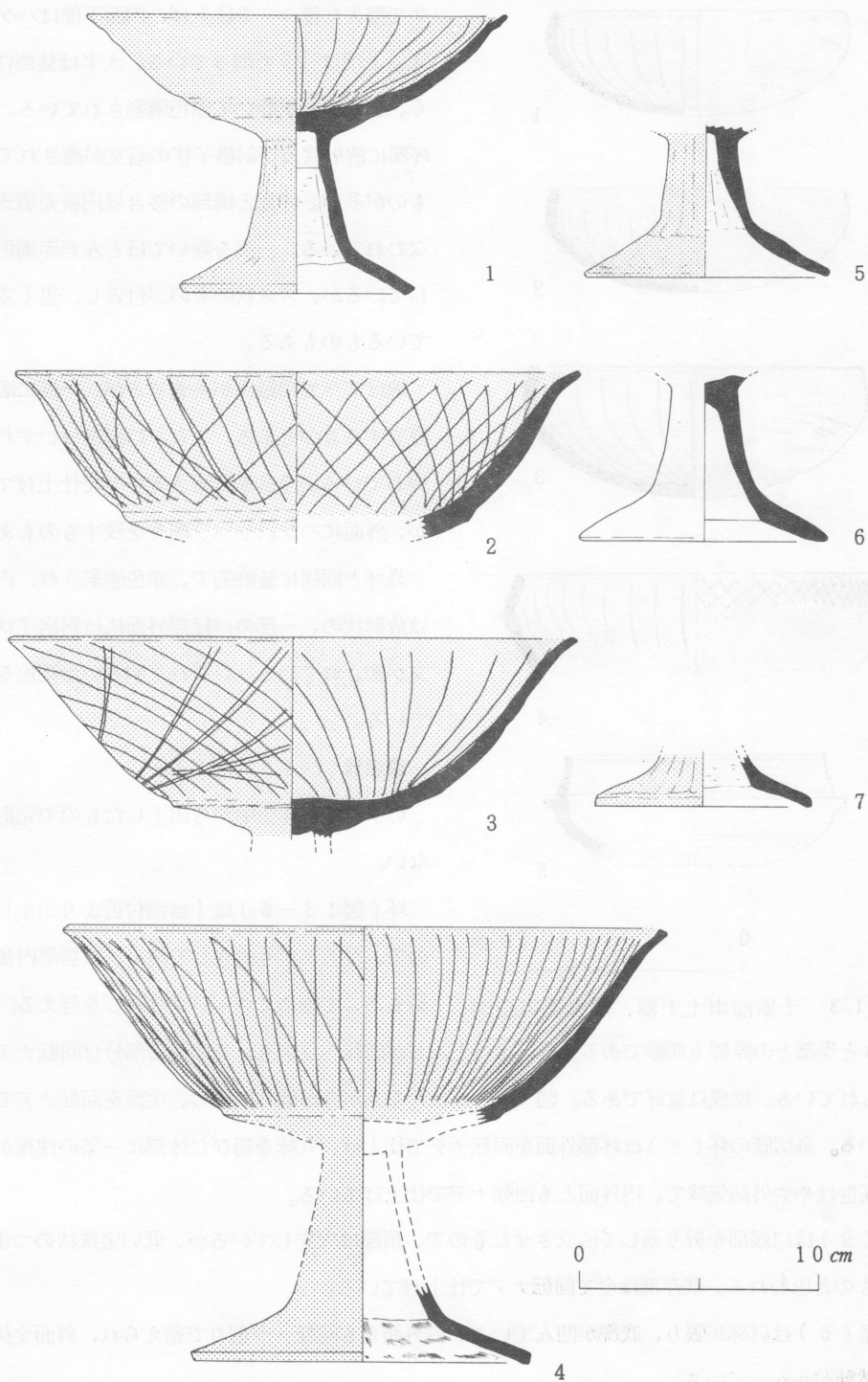


図12 土器溜出土土器実測図

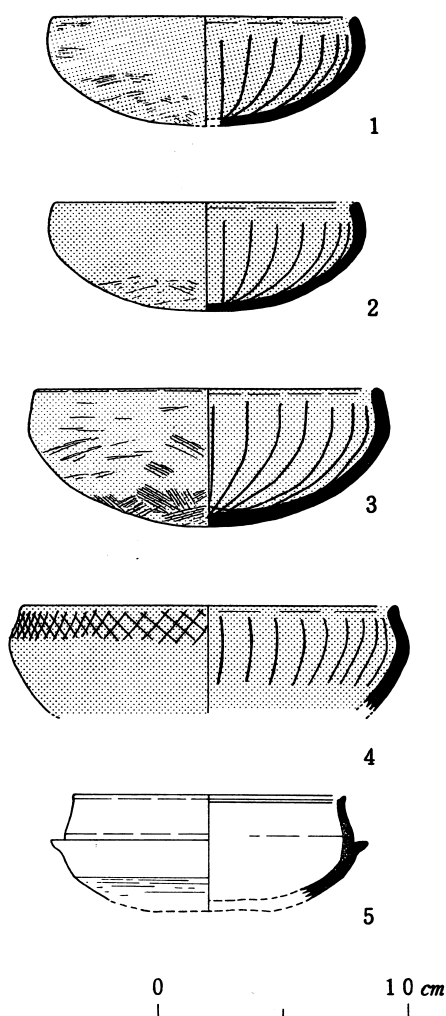


図13 土器溜出土土器、須恵器実測図

あがりを受部との界線も明瞭である。底部はほとんどが回転ヘラ削り、その他の部分は回転ナデで仕上げられている。焼成は良好である。図14-5はたちあがりが高く、口唇部内側に沈線もあって極めてシャープな感じを与える。たちあがりと受部との界線も明瞭である。底部はほとんどが回転ヘラ削り、その他の部分は回転ナデで仕上げられている。焼成は良好である。図14-5はたちあがりが高く、口唇部内側に沈線もあって極めてシャープな感じを与える。たちあがりと受部との界線も明瞭である。底部はほとんどが回転ヘラ削り、その他の部分は回転ナデで仕上げられている。焼成は良好である。図14-5はたちあがりが高く、口唇部内側に沈線もあって極めてシャープな感じを与える。

蓋(9)は口縁部を折り返して直立させたもので、頂部は欠失しているが、低い宝珠状のつまみをもつものと思われる。残存部は全て回転ナデで仕上げている。

小壺(6)は肩部が張り、底部が凹んでいる。内外面とも回転ヘラ削りで整えられ、外面全体に淡く自然釉がかかっている。

甕(7)は口縁部が緩やかに外反し、外面に段を有する。口縁部内外面は回転ナデで仕上げ、頸部

ケで整えた後ナデで仕上げ、内面下部はハケで整え、上部はヘラで削っている。大半は装飾性が強く、脚部内面を除いて赤色塗彩されている。また、坏部に放射状及び斜格子状の暗文が施されているものが多い。坏部と脚部の接合は円板充填式で行なわれている。一部を除いてほとんど赤褐色を呈しているが、スズ状のものが付着し、黒く変色しているものもある。

碗はすべて口縁部が内弯するが、一部に端部が直立するものもある。また、口縁部はいずれも肥厚している。全体をほとんどナデで仕上げているが、外面にハケ目やヘラ削りを残すものもある。

高坏と同様に装飾的で、赤色塗彩され、内面には放射状の、一部の口縁部外面には斜格子状の暗文が施されている。いずれも明るい赤褐色を呈している。

須恵器(図13・図14)

いずれも耕作土中から出土したもので完形品はない。

坏(図13-5)は土器溜付近より出土したもので、たちあがり直立して高く、口唇部内側に沈線もあって極めてシャープな感じを与える。たち

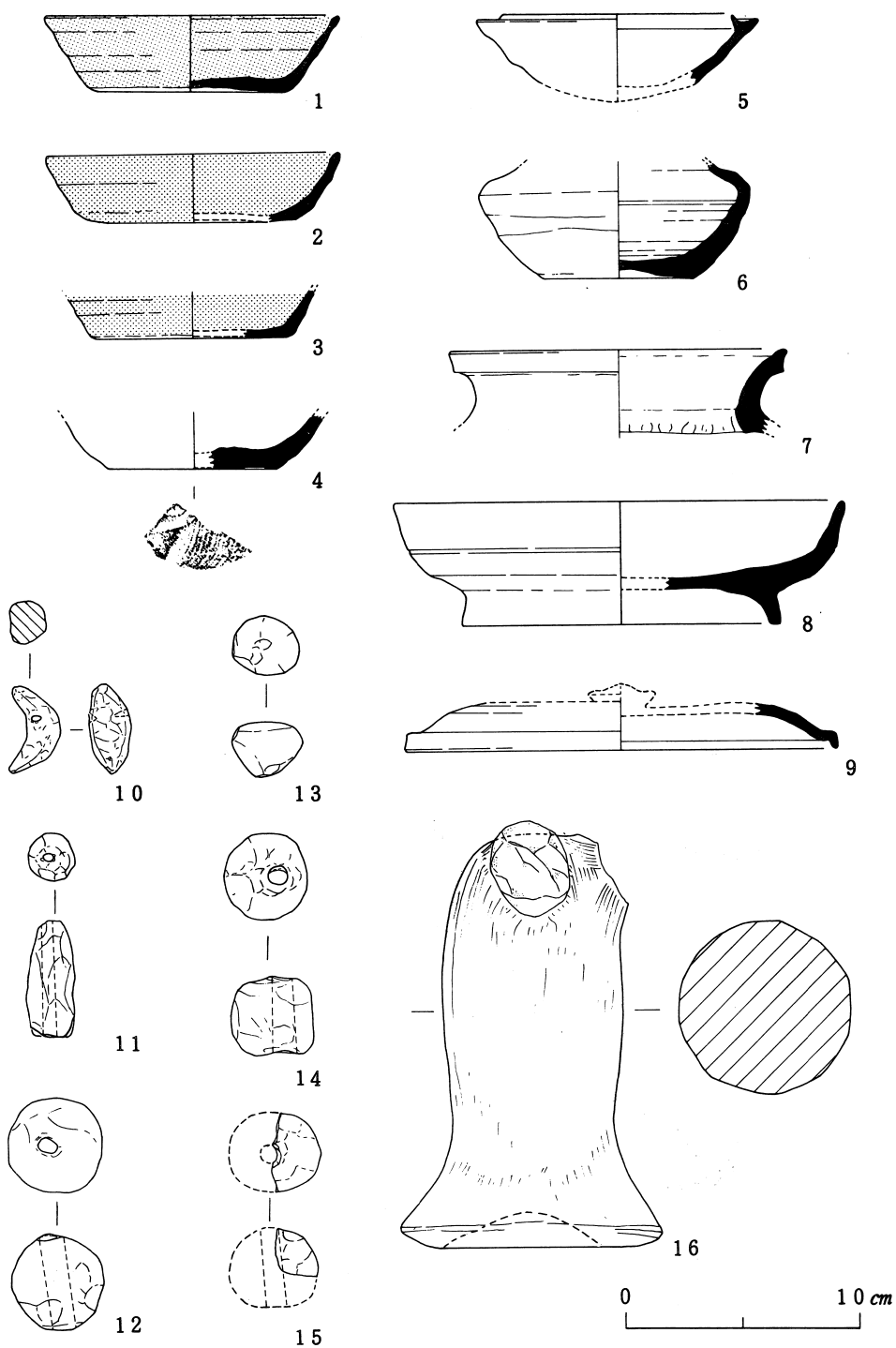


図14 土師器、須恵器、土製品実測図

内面は指頭圧痕、胴部内面には浅い同心円叩き目を残す。

土製品(図14)

すべてB-1区耕作土中より出土した。土製支脚(16)は頂部に2つの突起をもつごく普通の大きさのもので、全体を荒くハケ目調整している。また、ススが付着している。

丸玉(12・14・15)は直径4cm前後のもので、径1cm程の一方から穿った孔を有する。やや小形でいびつな形をした13は孔をもたない。11は管玉と考えられ、長さ5cm、最大径2cm、孔は径6mmで一方から穿ったものである。10は長さ3.8cmの勾玉と思われるが、両側から穿った孔は貫通していない。これらの土製模造品はいずれも指頭圧痕を残し、黄褐色を呈している。

柱穴出土土器(図14-4)

北側柱穴より出土した土師器坏(4)は黄褐色をしており、厚手で回転糸切底を有する。その他須恵器甕片、赤色塗彩された土師器坏片が出土しているが、小片のため図化しえない。

その他の土器(土師器)(図14・15)

坏(図14-1・2・3)はB-1区から出土したもので、他にも小破片がある。全体的に薄手で底部は糸切ではなく、指頭圧・ナデで仕上げ、体部は回転ナデである。底部を除いて赤色塗彩され、赤褐色を呈している。後述の墨書土器と類似するが、やや小形である。

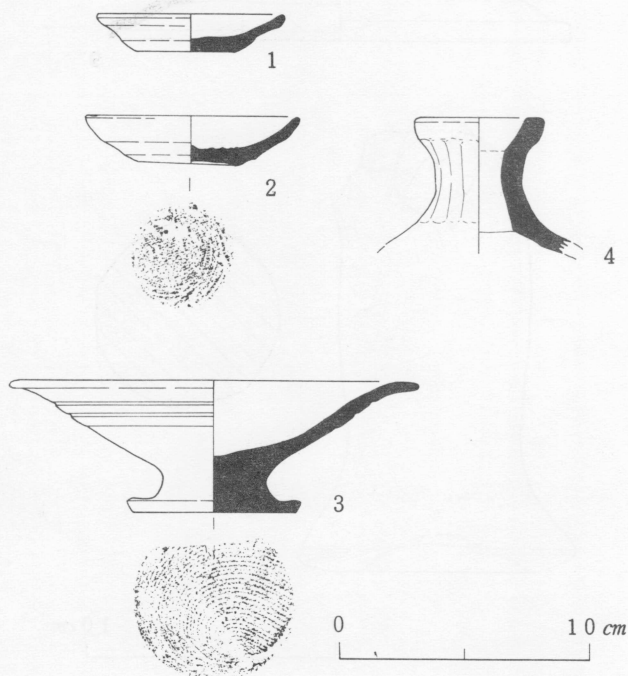


図15 土師質土器実測図

カワラケ(図14-1・2)はA-2区より出土し、内外面とも回転ナデで仕上げた通例のものである。底部は回転糸切りである。回転糸切の実足をもつ低脚坏(3)はA-2区より出土している。口縁部は大きく外反し、坏部外面には2条の沈線がめぐる。全体は回転ナデで仕上げられ、赤色塗彩されている。5は徳利形土器でA-4区の耕作土中から出土したものである。表面はへう調整、内面は回転ナデで仕上げている。

緑釉陶器(図16-2)

坏の底部のみを残す灰色の須恵質の胎土で、表面に淡く施釉し、

淡緑色を呈している。底部中央部には×印のへう記号を有し、そこには釉が濃くかかっている。B-1区耕作土中から出土した。

（隣接畑地内出土土器）（図16・図17）

今回の調査区の西隣で、以前かなりの土器が出土しており、中心となる時期は今回調査の出土土器とほぼ同じと考えられ、一連の遺構の存在が推定できるので併せて紹介しておく。

墨書土器（図16-1）

出雲市天神町森山善市氏が、'69年秋に採集したもので'72年報告にも紹介されている。

口径1.4cm、器高2.7cm、器厚2～3mmの土師器の皿で 一部破損している。底部が指頭で整えられている他は回転ナデで仕上げられ、赤色塗彩されている。今回出土した図14-1・2・3と類似するところが多いが、大形で浅い。

墨書は底部外面にあり、やや不明瞭であるが、「旱天」と判読できる。（注1）

須恵器（図17-3・4）

蓋環の身（3）は、今回出土の図13-5に類似するものである。たちあがりは直立して高く、口唇部には明瞭な段を有する。底部外面は多くの部分に回転へう削りがなされ、他は回転ナデ及びナデで仕上げている。全体的に薄手である。

4は低い宝珠状つまみをもつ蓋環の蓋である。口縁部を欠いているが、図14-9のように先端を折り返した形になろう。回転ナデで丁寧に仕上げている。

土師器（図17-1・2・5）

1は丸底で5の字口縁の形態をわずかに留めるものである。口縁部には内外面ともナデで仕上げ、肩部以下は外面ハケ目調整、内面は横及び斜めにへう削りしている。

2は厚手で5の字口縁の形態を比較的よく残している。口縁部は内外面ともナデで仕上げ、肩部以下内面は横方向のへう削りである。頸部内面には指頭圧痕を明瞭に残し、頸部外面には櫛描きの文様を施している。

5は小形で口縁部はくの字状を呈し、手法も上記のものと異なる。口縁部はナデで仕上げ、肩部以下は外面ハケ目調整、外面は横方向のへう削りである。口縁部内面のナデとへう削りは、境を接している。

注1. 井上寛司氏（島根大学助教授）に今回「旱天」と判読できる旨、御教示いただいた。

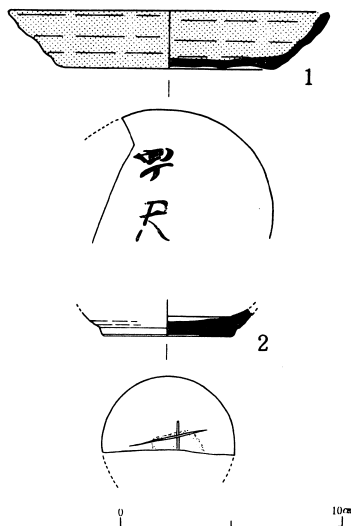


図16 墨書土器・緑釉陶器実測図

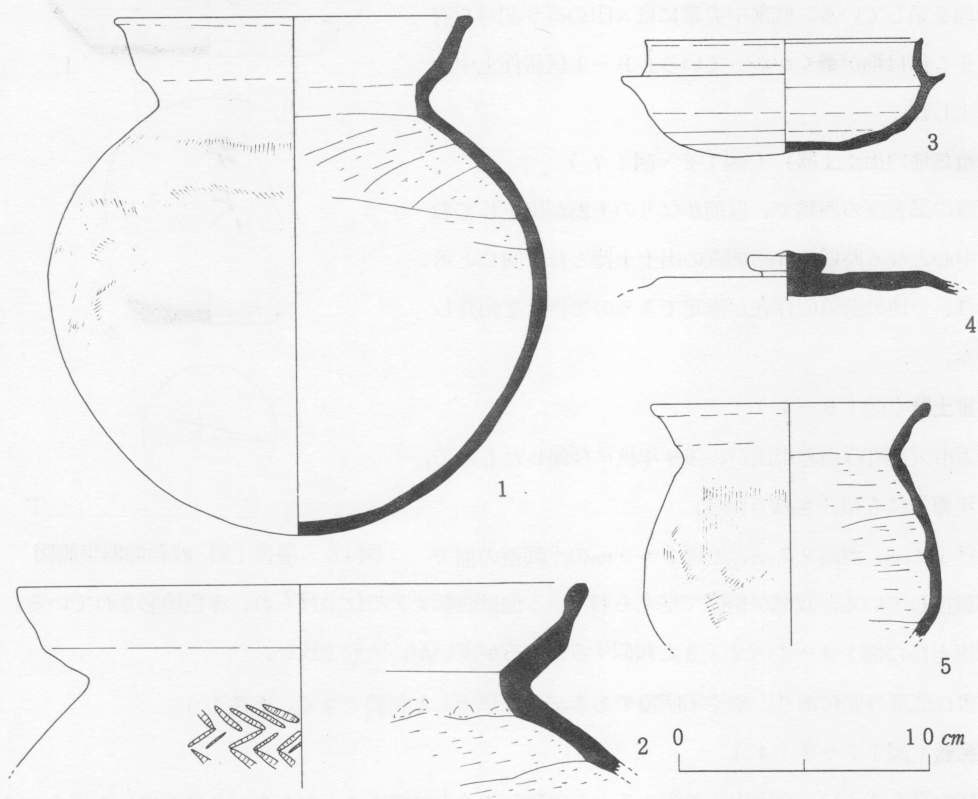
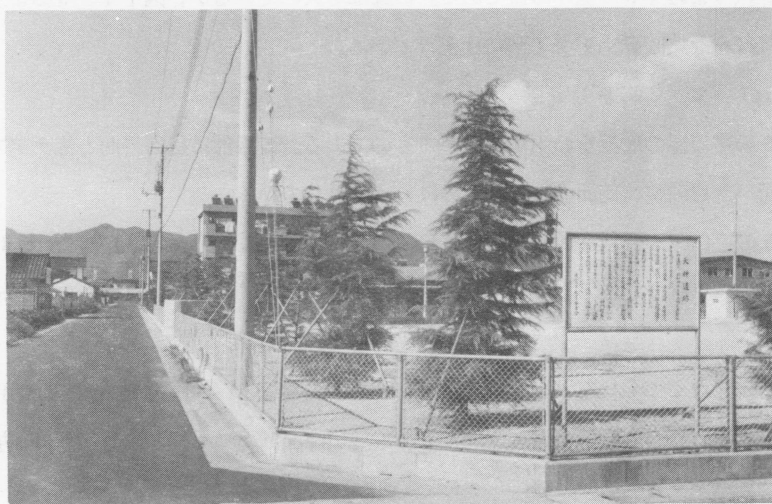


図17 隣接畑地出土土器実測図



天神南公園（'71年調査6区の東）と遺跡説明板

出土土器観察表

番号	出土地	器種	法量 (cm)	色調	形態・文様の特徴	手法の特徴	備考
図 9-1	B-1 耕作土	弥生 甕	口径25.6	淡褐色	複合口縁、外面4 条の凹線	口縁部ヨコナデ	口縁部のみ
図 9-2	"	"	口径24.2 胴径35.3	黄褐色	複合口縁、外面2 条の凹線、胴部に 櫛による刺突文	外面ハケ目、内面 ヘラ磨き	
図 9-3	"	弥生 壺	胴径25.4	"	櫛による刺突文、 斜格子文、沈線文	内面ハケ目、ヘラ 削り	口縁部を欠く
図 9-4	"	"	口径23.4	灰褐色	口縁部大きく外反	口縁部ヨコナデ	口縁部のみ
図 9-5	A-2 溝	"	口径17.0	淡褐色	口縁部やや外反	"	胎土粗い
図 9-6	"	弥生 甕	胴径24.5	黄褐色	2段に刺突文	外面ハケ目、内面 ハケ目、ナデ	口縁部を欠く
図10-1	B-1 土器溜	土師 甕	口径18.8	淡褐色	口縁部の稜明瞭	ヨコナデ、胴部内 面ヘラ削り	胎土粗い、口縁 部のみ
図10-2	"	"	口径14.4	"	口縁部わずかに稜 あり	口縁部内面ハケ後 ナデ	
図10-3	"	"	口径15.2	"	口唇部に浅い沈線 口縁部稜が痕化し 沈線あり、肩は張 らず直線状	ヨコナデ、胴外面 ハケ目、内面ヘラ 削り、頸部内面指 頭圧痕	胎土粗い
図10-4	"	"	口径14.6 胴径23.3 器高24.2	"	口唇部平、口縁部 わずかに稜あり、 肩が張る、丸底	ヨコナデ、胴部外 面ハケ目、内面ヘ ラ削り、底部内面 指頭圧痕	完形品、胴部以 下焼けて黒褐色
図11-1	"	"	口径17.2	黒褐色	口縁部に稜が残る	ヨコナデ、胴部外 面ハケ目、内面ヘ ラ削り	
図11-2	"	"	口径13.8	明黄褐 色	口唇部平、口縁部 直線的であるがわ ずかに稜が残る、 肩はやや張る	口縁部外面ハケ後 ナデ、胴部外面ハ ケ目、内面ヘラ削 り	
図11-3	"	"	口径17.8	"	くの字口縁	"	焼成不良
図11-4	"	"	口径18.8	淡褐色	口唇部平、くの字 口縁、口縁部厚い	ヨコナデ	
図11-5	"	"	口径15.6	黒褐色	口縁部外反	ヨコナデ、胴部外 面ハケ目、内面ヘ ラ削り	前記の甕類とは 手法が異なる、 時期差か
図12-1	"	土師 高坏	口径17.4 器高11.7 脚高 6.7	明赤褐 色	口縁部大きく外反、 脚部ハの字状に開 く	坏部外面ハケ後ナ デ、内面ナデ、脚 部外面ヘラ後ナデ、 内面ヘラ削り、ハ ケ後ナデ	赤色塗彩、坏部 内面放射状の暗 文
図12-2	"	"	口径23.2	"	坏底部に段あり、 口唇部浅い沈線	坏部外面ハケ後ナ デ、内面ナデ	赤色塗彩、内外 面に斜格子状暗 文

番 号	出土地	器種	法量(cm)	色 調	形態・文様の特徴	手 法 の 特 徴	備 考
図12-3	B-1 土器溜	土師 高坏	口径23.2	明赤褐色	坏底部に段あり、 口唇部浅い沈線	ナデ	赤色塗彩、外面 斜格子状、内面 放射状暗文
図12-4	"	"	口径24.4	"	口縁部大きく外反、 坏底部に段あり、 口唇部浅い沈線、 脚部ハの字状に開く	坏部ナデ、脚部外 面ナデ、内面ハケ 目	赤色塗彩、坏部 内面放射状、外 面斜格子状の暗 文あり、脚の一 部黒斑あり
図12-5	"	"	脚高 6.1	"	ハの字状に開く	外面ナデ、内面ナ デ、ヘラ削り	赤色塗彩
図12-6	"	"	脚高 5.7	黒褐色	"	内外面ナデ	
図12-7	"	"		明赤褐色	"	外面ヘラ後ナデ、 内面ハケ後ナデ、 ヘラ削り	赤色塗彩
図13-1	"	土師 壺	口径12.0 器高 4.5	"	口縁部内傾	内外面ナデ	赤色塗彩、内面 放射状の暗文
図13-2	"	"	口径12.4 器高 4.5	明赤褐色	"	外面ナデ、ヘラ削 り、内面ヘラ磨き	赤色塗彩、内面 放射状の暗文
図13-3	"	"	口径14.5 器高 5.5	"	"	外面ナデ、ハケ目、 内面ナデ、ヘラ磨 き	"
図13-4	"	"	口径14.6	"	口縁部は全体的に 内傾するが口唇部 は直上	ナデ	赤色塗彩、外面 口縁部は斜格子 状、内面放射状 の暗文
図13-5	B-1 耕作土	須恵 蓋坏	口径10.9	青灰色	直立にたちあがり 口唇部に段あり	ヨコナデ、体部ヘ ラ削り	底部を欠く
図14-1	"	土師 坏	口径12.2 器高 3.3	明赤褐色	体部直線的、平底	ヨコナデ、底部ナ デ、指頭圧痕	赤色塗彩、胎土 密、器肉薄い
図14-2	"	"	口径12.0 器高 3.0	"	体部丸味を帯びる、 平底	ヨコナデ、底部ナ デ	赤色塗彩、器肉 薄い
図14-3	B-1 表 土	"		"	体部直線的、平底	"	"
図14-4	B-1 ピット	"		淡褐色	平底	ヨコナデ、回転糸 切底	器肉厚い
図14-5	B-1 耕作土	須恵 蓋坏	口径 9.6	青灰色	たちあがり短く内 傾	ヨコナデ	底部を欠く
図14-6	A-2 耕作土	須恵 小壺		灰 色	肩が張る、平底	ヨコナデ、底に一 部指頭圧痕残る	口縁部を欠く
図14-7	"	須恵 甕	口径14.0	"	外反する	ヨコナデ、頸部内 面指頭圧痕、同心 円状叩き目	淡い自然釉がか かる、口縁を欠 く
図14-8	"	須恵 蓋坏	口径18.8 器高 5.2	"	丸味を帯びる、体 部に沈線あり、高 台付	ヨコナデ、糸切底	
図14-9	"	"	口径18.2	青灰色	口縁部に段あり	ヨコナデ	つまみ部欠く、 器肉薄い

(小 結)

多面的検討は後述することにして、ここでは今回調査した範囲内における遺構、遺物について若干整理しておく。

B-1区 土器溜

出土品はすべて土師器で、甕、高坏、碗のセットとして把握できる。出土状況、形態及び手法から極めて同時性が強く、その時期は古墳時代中期と考えられる(注1)。なお、高坏、碗には赤色塗彩され暗文が施されたものが多く認められ、また周囲から出土した一連の土製品から祭祀性の強い遺構として理解できよう。

B-1区 柱 穴

黄褐色土層に掘り込まれた南北に結ばれる柱穴は、'71年、'75年の調査も勘案すれば、やはり官衙的な建物群の一部と考えられる。また、直接遺構には伴なわないが、同区から出土した緑釉陶器や隣接畑地内からかって出土した墨書土器は上記の考え方を補強する。時期は、北側柱穴内から出土した土師器より平安時代頃と考えられ、前回及び前々回の柱穴群よりいく分新しい。

その他の遺構

A-2・4区の溝、ピットは、時期、性格ともに全く不明といわざるをえない。今後の類例を待つところである。

遺構に伴なわない遺物

弥生式土器は壺、甕のみで、各区から出土している。全て中期後葉のものと考えられる(注2)。須恵器も各区より出土しており、器種は蓋坏、小壺、甕があげられる。I期と考えられる1例を除いて、他はIV期以降のものである。土師器は土器溜出土土器と同種のものが各区から出土している他、B-1区から赤色塗彩された坏が多数出土しておりその時期は概ね平安時代頃と推定できる。その他、中世以降と考えられるものも各区より多数出土している。既述の土製品は、祭祀遺物として把握されているもので、土器溜との関連も考えられる。緑釉陶器は、平安時代も早い頃のものと考えられ、これまでの出土例として県内では4遺跡しか知られていない(注3)。

今回の調査区域では、古墳時代中期の祭祀性の強い土器溜と平安時代と考えられる官衙的色彩の強い建物群の一部が確認され、さらに弥生時代中期から中、近世にかけての多くの遺物が出土した。これらは、今後天神遺跡全体を考えていく上で価値のあるものといえよう。

注1. 青木Ⅱ期と類似点が多い(青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』'78年)

2. 「弥生式土器集成」(『八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅰ』'77年)

3. 出雲国庁跡、出雲国分寺(松江市)、隠岐国分尼寺跡、尼寺原遺跡(隠岐郡西郷町)